紫芳会だより　～輝く先輩達～

No.18
2014.2.1.発行

代々木ゼミナール人気講師

富田　一彦氏 (高校29期)

卒業後一浪して東大に入るも、同級生に「お前と同姓同名の奴が東大に受かってるぞ」と言われる体たらく。演劇コンクールをきっかけに一時演劇にかぶれ、気づいたら大学卒業に六年を要した。当然その世界で芽が出る訳もなく(顔写真参照)、やがて教育業界に流れて現在に至る。予備校では「高い論理性と低い腰」をモットーにするも、同僚からは「頭が高い」と怒られる始末。つまり一番見習ってはいけない先輩の例---とはご本人の弁。
受験英語のカリスマ的存在で、『富田の英語長文問題 解法のルール144 上･下』『カリスマ先生の英文解釈 7日間で基礎から学びなおす』『The word bookとみ単』など著書多数。

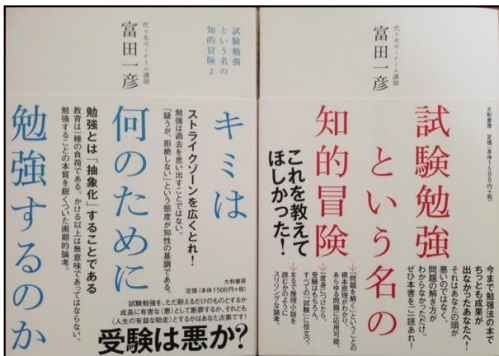
後輩の皆さん、こんにちは。高校29期の富田と申します。もちろん皆さんから見れば「先輩」に当たるわけですが、50過ぎのおじさん（お爺さんに向けて絶賛驀進中）に先輩面されてもピンと来ないでしょうね。ただ、偶然なのですが、私はちょうど皆さんくらいの年齢の人にものを教える仕事をしているので、私にとっては皆さんのような若い方たちに語りかけることにはそれほどの違和感はありません。もちろん会ったこともないのですが、自分と同じ場所で高校生活を過ごしている人々だと思うだけで、奇妙なほどの親近感を覚えます。そんなわけで、暫くの間、私の戯言にお付き合いください。

私が立高で学んだこと、それは「自分で考える」ということでした。今とは制度も雰囲気も違うのかもしれませんが、私の在学当時、立高には自由の気風があふれていました。制服も、上履きもなく、先生方からの強い縛りもなく、基本的な生活習慣さえしっかりしていれば、別に何をやっていてもいい、という雰囲気でした。入学式の後、教室で担任の先生の到着を待っていた時、突然教室に三年生の先輩が登場し、「立高生はかくあるべし」という演説をぶっていくのに接して、ほぼただの中学生に過ぎなかった私は度肝を抜かれた覚えがあります（それから二年後、自分が新入生の教室で演説をぶつことになろうとは、その時は思いもしませんでした）。

自由、というとありがたい気分になるかもしれませんが、実は自由は結構しんどいものです。私もその当時の立高の様々な行事に生徒会の一員として関わりましたが、何をやってもいいということは、その結果生じる成功も失敗も、すべての責任は自分に降りかかってくるということだということを、その経験を通じていやというほど思い知りました。極端な話、誰かから「あれをやれ、これをやれ」と言ってもらえれば、それがどれだけ鬱陶しくても、その通りにやった結果失敗した時には、その責任は指図をした人物に押しつければすみます。でも、自由にやるとなると、最初の思いつきの時点で想定外だった事柄まで、すべての決断は自分に任され、その分評価も自分に降りかかってきます。

すると、ある意味では自分を守るために、「自分で考えること」がとても重要になってきます。それも、「想像力を持って考える」ことが重要です。目の前に見えていることだけを材料に考えていたのでは、未来に対処することはできません。今目の前にはなくても、いずれ起こるであろうこと、いずれ出会うであろうことを想定して、その時にうまく対処できるような想像力を持つことが、より豊かに生きるためには必要なのです。

私の在学中の立高には、そういう想像力を要求するだけの自由な雰囲気がありました。今でも私は、そのことにとても深く感謝しています。表面上は変わっても、今の立高にも同じような自由の気風が溢れていると聞きます。それが本当ならば、そういう恵まれた、一方で自分を甘やかすわけにいかない環境の中で、様々な行事や活動に積極的に参加し、もちろん勉強もしっかりやって、二度とない高校生活を、様々な意味での将来の糧に変えていっていただきたい、と心から思います。



やはりちょっとお説教臭くなりましたね。何しろもうおじさん真っ盛りなので、説教爺への道をまっしぐら、というわけです。聞き流してもらっていっこう構いませんが、同じ空気を三年間吸っていた元在校生として、ほんの少しだけの先輩風をお許し下さい。では。